



#40

落し物には服がある？

著：藍澤たすく

イラスト：かもめ遊羽

学校からのいつもの帰り道、道端に白い手袋が落ちていた。それもなぜか片方だけだ。

「そう言えばどっかのラジオ番組で『なぜ道に落ちている軍手はいつも片方だけなのか?』って特集やってたなあ……」

片柳淳はそう呟きながら、その手袋を拾った。

シルク製の上品な仕上がりだ。おそらく日焼け防止用の物だろう。

(結局ラジオではどんな結論が出たんだったっけか……?)

思い出せないまま淳は落とした人が判りやすいように、近くの電信柱にそれをひっかけるとそのまま道を曲がった。

「!?」

今度はスカートが落ちていた。

それも自分が通っている高校の制服の……。

淳は訝しげにその横を通過した。

さすがに今度は手にとるわけにはいかない。

「!?」

次の角を曲がった瞬間、淳はまたもや固まった。

今度は制服の上着と、ブラが落ちていたからだ。しかもブラの向こうには白いパンツ（ズボ

ンという意味ではなく!) までも落ちてている……!?

(これは……まさか……)

淳の頭の中でピンク色な妄想がスパークした。

まさか、ここでこれを順番に脱いでいって……それで……。

そうだ、ない話じゃないぞ!

「まだ温かい……遠くへは行ってないはずだ……」

指でブラに触れた淳は、どこかの刑事ドラマで聞いたような台詞を言うと、大急ぎで次の角を曲がった。

果たしてそこに全裸の女の子は……いなかった!

代わりにそこにあっただのは……。

「うわ……」

淳は思わず声を洩らすと2、3歩よろけるように後ずさりした。

そう、彼の目の前に血塗れの学生鞆が落ちていたからだ。

おびだたい血液を浴びたそれはあからさまに、ここで禍々しい凶行が行われたことを示唆していた。

「ど、どっしょうよう……」

淳は戸惑った。

さきほどのピンク色の妄想から一転、今度は灰色の犯行現場に突入だ。
この時間の郊外の住宅街は人通りも少ない。

警察に通報するべきなのだろうか？

しかし実際に死体を見たわけでもないし、まだ確実に殺人事件と決まったわけでは……。

「っ!」

刹那、後ろに嫌な気配を感じた淳はとっさにその場から飛び退いた。

間髪入れず、淳がいた場所に血塗れの包丁が突き立てられる。

少しでも避けるのが遅れていたなら、確実に背後から心臓を抉られていただろう。

「ひっ……」

淳の目の前には黒いフードをすっぽりかぶった大男の姿があった。

口許しか見えない大男は何かをぶつぶつ呟きながら、淳の方にゆっくりと歩いてきた。

その異様な迫力に気圧され、淳は思わずその場に尻餅をついた。声を出そうにも恐怖で喉がひりついて何も出てこない。腰も抜けてしまったようで、逃げ出そうにも立ち上がることもすわらない。

「クロス……クロス……クロス……」

大男は無機質な声で呪文のように繰り返している。

(死ぬ!? 俺、死んじゃうのか、こんなところで!? こんなことで!?)

恐怖に目を見開く淳。しかしやはり体は動かない。背中を冷たい汗が伝っていくのが判る。

やがて男はゆっくりと包丁を振りかざして……。

「カァー……ッ!」

突然大きな声が周囲に響いた。

「いやー、良かったよ! 今の恐怖の表情! 最高だったね!」

向かいの角からニコニコ笑顔のポニーテール女子高生がやってきた。淳と同じ学校の制服を着ている。

手にはメガホンを持ち、小脇には何やら台本のような物を挟んでいた。

「? ? ?」

状況が把握出来ず大量のクエスチョンマークを浮かべる淳。

「あはははは。あたしホラーシネマ研究部部長の阿佐ヶ谷飛鳥って言うんだけどさ。今、自主制作映画を撮って、君はそのエキストラになったってわけ!」

「? ? ?」

そう言われてもとても理解が追いつかない。

やがてどこに隠れていたのか、大きなビデオカメラを担いだ女子2人、さらに大きなガンマイクをもった男子1人がわらわらと路上に出てきた。

みんな一様にいい笑顔である。

「最初に落ちたスカートを見た時の鼻の下をのばした表情からのギャップが良かったわよね〜」

「うん、あの恐怖が張り付いた表情は最高だったよ〜」
「俺の殺人鬼の演技も迫真だっただろ？ な？ な？」

口々に勝手な感想を述べながらホラーシネマ研究部（学校では「ホラ死ね団」と呼ばれていることを、その時淳は思い出した）の面々が談笑している。先ほどまで血塗れの包丁を持っていた大男もその輪に加わっている。当然ながら彼も「ホラ死ね団」の一員のようだ。

「えっと、確か片柳くん？ だったっけ？ 良かったらテイク2行ってみない？ さっきのも良かったんだけどさ、もっと恐怖に怯える感じを強調して出してほしいんだよね」

ニコニコ笑顔でそう言ってくる飛鳥

そんな彼女たちの姿を見て、淳はだんだん腹が立ってきた。こんなドッキリみたいな感じで騙されて、しかも怖い思いをさせられて……。しかもそれをもう1回やってくれときたもんだ！

「冗談じゃないですよ！ 人をバカにするにもほどがあります！ 僕はもう帰らせてもらいます！」

「まあまあまあ、そう言わずに！ これはキミにしかできない演技なんだよ！」
憤然として帰ろうとする淳を飛鳥が引き留める。

「僕にしか、って単にドッキリにひっかけただけじゃないですか！」

「いやいやいや、キミにしかできないんだよ、恐怖に怯える人間の表情は！」

そこまで言うと言飛鳥はいたずらっ子のような笑みを浮かべた。

「なんせ、あたしらゾンビだからね」

「はあ？」

飛鳥の意味不明発言に怪訝な表情を浮かべる淳。

……どうも自分は関わり合いになるべきではない、頭のネジが2、3本はずれた人達に遭遇してしまっただようだ。

「意味がわかりません！ とにかく僕はもう帰らせてもらいます！」

「まあまあまあ、そう言わずに！」

「いい加減もうしつこいですよ！」

怒った淳は引き留めようとする飛鳥の腕を乱暴に振り払う。

その瞬間。

ポトリ。

飛鳥の右腕が地面に落ちた。

それはもう肩口から、見事にざっくりと。

あまりの展開に淳は言葉を失い、路上に落ちた腕と、片腕になってしまった飛鳥を交互に見比べた。そしてその目が徐々に恐怖で見開かれていく。

「ほらあゝ、だから言ったじゃん。あたしらゾンビなんだからさゝ、もっと丁寧ていねひに扱あつかってくれないと。なんせ腐くってんだからさゝ」

腕がとれたというのに、まったく意に介さない様子でそれを拾う飛鳥。

そして拾った右腕をにこやかに淳に突きつける。

「じゃ、テイク2やつてくれるかな？」

「ぎゃあああああああー!? とれた!? 腕がとれたあああああー!?」

淳は絶叫してその場にへたり込んだ。

なんだ!? 一体何が起こってるんだ!? 僕は今いったい何を見てるんだ!? これは現実か、

夢か!? 悪い夢なら早く覚めてくれ! お願いだー!!

「はい、カーーーーット!」

飛鳥の元気良い声が響いた。

「いやー、最高だったよテイク2! 人類の恐怖の集大成みたいな怯えっぷり! やっぱキミ才能あるよ、片柳くん!」

言うが早いか、飛鳥の右腕がによつきりと生えてきた。

「は?」

「あ、これ? 特殊メイクつてやつだよ。すごいだろ、まったく本物にしか見えないだろ?」

ぽかんと放心する淳に、飛鳥は得意気に胸を張る。

「ほらこつちにも生首とか生足とかあるよくん♪ 血塗れで素敵すてきでしょ♪」

血塗れの生首数本と生足数本を抱えてにつこりと笑う飛鳥。

なかなかシニールな絵えづら面である。

「は、ははは……」

淳はもう恐怖を通り越して変な笑いが出始めていた。

しかしすべてが作り物だったという事が判ると、また徐々に落ち着きと怒りが復活し始めた。

「……これ、まさかその自主制作映画に使うわけじゃないですよね?」

カメラを指さし、淳は静かな怒りを湛たえた目でそう訊いた。

「え? 勿論使うよくん。だって最高の演技だったじゃん?」

「演技じゃありません! ただのドッキリじゃないですか!? 僕は絶対こんなの認めませんか

ら! 使わせませんからね!」

「えい、そんなつれないこと言わないでよ、淳くん♪」

「なれなれしく触らないでください!」

淳がばしっと飛鳥の手を振り払う。さすがに今度は腕が落ちることはない。しかしそこで飛鳥の表情にさっと陰が差した。

「……夢だったんだよ」

「え？」

「この自主制作映画を作って全日本ホラーシネマコンテストに出ることが、今は亡き先代部長の夢だったんだよ！ だから、だから、お願いだよ！片柳くうくん！」

「そんな安っぽい泣き落としにひっかかるとでも思ってるんですか!? とにかく！ 今撮影したデータは絶対破棄してもらいますからね！ カメラの人！ こっちに来てください！」

「ちえっ……」

飛鳥があからさまに残念そうな顔になる。

「……まあ、しょうがないかあ。じゃ、岬、カメラ持ってきて」

「はい……部長……」

飛鳥に指示されたお団子結びの女子が、渋々と言った表情でカメラを淳に差し出した。

早速淳はカメラのプレビューを表示すると、自分が映っているシーンを次々に削除していった。しかしそれにしても我ながらひどい顔だ……。

「あゝあ、もつたいない……」

飛鳥が嘆息混じりに天を仰いだ。

「これで全部消えましたね……よしっと！」

自分のシーンすべてを削除したことを確認すると、淳は満足気に頷いた。そして。

「そっちのカメラの人も！ 早くカメラ持ってきてください！」

きりっとした表情でそう告げる。

「は？」

瞬間、飛鳥が怪訝そうな表情を浮かべる。

「だから！ そっちのカメラにも僕 撮影されてるんでしょ!? さっさと来てください！」

「カメラは1台だけだよ？」

「え？」

飛鳥の応えに、今度は淳が怪訝そうな表情を浮かべる。

「当たり前じゃーん。このカメラ1台いくらすると思ってるのよ。うちの部の予算じゃ1台あるだけでもありがたいってんでしょ？」

「だって、あそこにはほら、カメラ構えた女の人……」

淳が指さした先には確かにカメラを構えた女子がいる。が、飛鳥たちにはまったく見えていないようだ。

（ふふふ、ありがとう。おかげでいい画が撮れたわ。これでももう思い残す事は何もない——）

突然、淳の頭の中に直接響くような声がした。と、同時にカメラを構えた女子の姿がすーつと消えてなくなった。

「……あ、あはははは、ひ、ひっかかりませんよ？ これも特撮とくさつなんでしょう？ SFXなんでしょう？」

淳がひきつった笑顔で飛鳥に問いかけるが、彼女たちは本当に何が起こっているか判らない様子でお互い小首を傾かむげながら顔を見合わせている。

その時飛鳥のポケットからひらりと一枚の写真が舞い落ちた。

「あ、いっけね、日向部長ひゅうが落としちゃった」

「日向……部長……？」

「ほら、さっき言った今は亡き先代部長だよ。去年撮影中の事故で亡くなっちゃったから、こうして撮影の時は写真で同行してもらってるんだ」

にこやかに写真を見せる飛鳥。

そしてそこに映っていたのは、間違いなく先ほど音もなく消えていったカメラ女子だった。

「う、うわあああ~~~~!! あああああ~~~~!!」

淳はこの日一番いい恐怖の表情で、大絶叫したのだった。

おしまい